〔報告〕

障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらす交流会の進行

北川かほる1)

要 旨

本研究の目的は、看護職が障害児・者の親の会と協同開催し、司会を担当している交流会において参加者と司会者の発言について検討し、障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらす交流会の進行について示唆を得ることである。平成17年度開催した11回の交流会に参加した障害児・者の母親延べ115名と司会者延べ11名を対象に、交流会中の発言を質的に分析した。その結果、主に司会者と経験の長い親が、参加者の【発言を引き出す】を行い、参加者は【困難な経験・思いを語る】【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】ことでセルフヘルプを促進していることが明らかとなった。看護職は交流会の司会者として、経験の長い親が参加した交流会では発言数を減らし、経験の長い親の【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】【発言を引き出す】発言の機会を多くつくり、経験の長い親が不参加の交流会では、看護職が【発言を引き出す】【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】発言を多くして、参加者のセルフヘルプを促進する援助をしていた。この結果より、看護職は交流会の進行において、ファシリテーター的役割の司会者として、参加者の構成により発言内容・発言数を調整し、交流会に参加した障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらす援助をしていることが明らかとなった。

キーワード:エンパワーメント、家族看護、障害児・者

1. はじめに

地域で暮らしている障害児の主な養育者は母親が大半であり、障害児を養育する母親の多くは、QOLの低下傾向がみられる¹⁾²⁾. 日暮ら³⁾は、障害児とその家族のQOLを高めるには、同じ悩みの共有や意見交換ができるセルフヘルプグループ(以下、SHGとする)への参加も有効であると述べている。したがって、看護職が障害児の家族支援の1つとして親の会を援助することは重要と考える。

障害児の家族のQOLを高めるといわれている障害児の親の会に関する看護・保健分野からの研究は、親達が運営するグループの機能や特徴に関する調査が多い^{4/5)}. 看護職による援助に関しては、牛尾ら⁶⁾による、在宅重症心身障害者の母親の"グループづくり"などの報告がある. しかし、多くは親の会の

会合場所の貸し出しや助言ⁿなど、側面からのサポートの報告である.

看護職である研究者は、障害児・者の親の会と協同して、「障害児者の家族交流会」(以下、交流会とする)を平成15年度より平成18年度末までの4年間月1回開催していた. 交流会は、会の案内をみて当日自由意志で参加した障害児・者の母親(家族)達と、障害児の子育でに関連したテーマを基に自由に活し合いをする会である. 交流会の開催については、障害児・者の親の会のメンバーと研究者が年度末に反省会を開き、一年間の反省と次年度の交流会は、SHGの一つである親の会と看護職である研究者が協同して開催していた小グループミーティングである. を自由に記述してもらい、1年分を冊子にまとめて

¹⁾滋賀県立大学人間看護学部

いた.この感想には"子育てを見直すことができた" "自分だけでないという安心と共感を得た" "発言 に勇気づけられた" "力や元気をもらった" などが あった.これらの感想から,交流会は参加した障害 児・者の母親 (家族) にエンパワーメントをもたら すことが示唆された.

しかし、岡⁸⁾は、SHGに専門職が援助するとヒエラルキー構造の反映などの弊害があると述べている.一方、三原⁹⁾は、専門職とのセルフへルプ活動の連携と関係の発展により、メンバーのエンパワーメントが高まっていくと述べている.このようにSHGへの専門職援助についてのとらえ方も様々である.

そこで、エンパワーメントをもたらすと示唆された交流会において、看護職の司会者はどのような発言や援助を行い、そして障害児・者の母親達がどのような発言をしているのかが判れば、看護職が障害児・者の母親のエンパワーメントを援助する一方法が明らかになると考えた.

本研究の目的は、看護職が障害児・者の親の会と協同開催し、司会を担当している交流会において参加者と司会者の発言について検討し、障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらす交流会の進行について示唆を得ることである.

Ⅱ. 研究方法

1. 対象と期間

対象は、平成17年度中11回の交流会に参加した障害児・者の母親延べ115名、司会進行役の研究者 (以下、司会者とする)延べ11名の計126名である. 司会は同一者が継続して行った.

期間は、平成17年4月から平成18年3月まで.この間12回開催した交流会中,1回は参加した一家族の抱える個別問題の相談形式になったため、分析の対象から除いた.

2. 交流会の実際

文書による交流会の案内は、日時、当日の会のテーマを記載し、養護学校(肢体不自由・発達障害)2校のPTAを通して在校生に配布し、また鳥取大学医学部附属病院脳神経小児科外来・県立総合療育セン

ター外来・障害幼児通園施設には自由に取れるパンフレットなどと一緒に置いてもらった.

テーマは、各交流会終了時のアンケートに記入された希望のテーマから研究者が選択した。平成17年度のテーマは「現在の悩み」「思春期の子育て」「親の精神的疲労」「兄弟姉妹の子育て」などであり、一回の交流会は約2時間であった。

3. データ収集

交流会参加者の了承を得た上で、交流会の開始から終了まで対象者の会話をテープレコーダーに録音 した

4. 分析方法

交流会中の会話のデータ分析は、舟島¹⁰による看護概念創出法を参考に、分類、抽象化をすすめた.この分析方法を参考にしたのは、看護概念創出法は、看護に関わる多様な現象を構成する人間の行動や経験の全体構造を明らかにする質的分析方法であるため、交流会に参加した障害児・者の母親の子育てに関する多様な発言の構成を説明できるコアカテゴリが抽出できると考えられたためである.

各交流会の会話の録音を逐語記録に起こしたデータから、セルフヘルプの視点からみた障害児の子育でに関連する発言を抽出しコード化した. 抽出したコードを類似したコードに分類し、各々、「この母親と司会者の障害児の子育でに関連する発言はセルフヘルプという視点からみるとどのような発言か」という持続比較のための問をかけながら、サブカテゴリ名を抽出した. 11回の交流会の会話のサブカテゴリ名をつける過程で、サブカテゴリ名を統一させた. 次にこのサブカテゴリ名を分類し、同じように「この母親と司会者の障害児の子育でに関連する発言はセルフヘルプという視点からみるとどのような発言か」という持続比較のための問をかけながら、カテゴリ名を抽出し、さらに同じように分類、抽象化を行い、コアカテゴリ名を抽出した.

5. 分析の信頼性

対象者の発言内容について研究者が解釈したことに違いがないかを、参加者全員が確認できるように、各交流会後に交流会中の会話を約3,000~5,000字にまとめた文書を郵送し、訂正や削除を受けることで

データの信頼性を確保した.また,データの分析の 過程では,障害児・者の家族看護や障害児・者とそ の家族の療育に携わる学識経験者にデータ分析の妥 当性について指導を受け,データ分析の信頼性と妥 当性を高めた.

6. 倫理的配慮

各交流会の冒頭に、研究の趣旨、研究参加は自由意志であり、同意の随時撤回、プライバシー保護について文書と口頭で説明を行い、書面で同意を得た.また、交流会の会話は承諾を得て録音し、データ処理は研究者自らが行い、使用するデータは対象者の承諾を得た.なお本研究は、鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得た研究計画書に基づいて行った.

7. 用語の定義

本研究で用いた「セルフヘルプ」とは、障害児・者の母親(家族)が交流会に参加し、子育ての経験を語り、子育ての知識・技術を学び、子育てしていく力を高めることである.

「エンパワーメント」とは、専門職の援助により、 障害児・者の母親が障害があるわが子を育てる力を 高めるプロセスのことである。

「経験の長い親」とは、高校卒業以上の障害者を もつ親である.

「経験の短い親」とは、中学生以下の障害児をも つ親である.

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の特性

母親の年齢は27歳から60歳であった.子どもの年齢は3歳から28歳であった.子どもの障害は生来的なものであり,交流会参加時,子どもの障害は固定化していた.また,障害により寝たきりで生活全般に介護や医療的ケアが必要な重症心身障害児・者から,身辺生活は自立している発達障害児・者まで多様であった.

子どもの生活状況は、幼稚園、障害児施設に通園、小学校普通学級・障害児学級、養護学校に通学、小規模作業所に通所、グループホームで生活しているなどであった。子どもの年齢別分類では、幼児17名、小学1年生15名、小学2~6年生50名、中学生18名、高校卒業後15名であった。高校生の子どもの親はいなかった。したがって、経験の長い親は15名、経験の短い親は100名であった。11回開催した交流会への同一人物の参加状況は、1回のみが14名、最も参加回数が多かったのは10回で2名であった。

2. エンパワーメントをもたらす交流会中の発言

126名の対象者から収集したデータを分析した結果, 2,107のセルフヘルプの視点からみた障害児の子育でに関連する発言コードを抽出した. ここから交流会参加者にエンパワーメントをもたらす発言として, 20のサブカテゴリ, 8 つのカテゴリ, 4 つのコアカテゴリを抽出した(表1).

| コアカテゴリ | カテゴリ | サブカテゴリ |
|-------------|--------------|---------------|
| 困難な経験・思いを語る | わが子の経験・悩みを語る | わが子の紹介 |
| | | 悩み |
| | | 悩みの相談 |
| | | わが子の経験 |
| | 親の経験・思いを語る | 親の経験・思い |
| | | 抱負 |
| 経験・知識を伝える | 子育ての経験を伝える | わが子の経験からの情報 |
| | | 他の子の経験からの情報 |
| | 子育ての知識を伝える | 一般的情報 |
| | | 子育てに関する方法の提案 |
| | | 子育てに関する考え方の提案 |
| | | 子育てに関連した問題の指摘 |
| 困難な子育でを共有する | 困難な経験・思いに共感 | 子育ての悩みに共感 |
| | | 子育ての経験・思いに共感 |
| | 経験・知識に賛同 | 子育ての方法に賛同 |
| | | 子育ての考え方に賛同 |
| 発言を引き出す | 発言の機会をつくる | 発言を促す |
| | | 説明を促す |
| | 発言の方向を示す | 会の進向の提案 |
| | | 至くれた似るの解剖 |

表1. 障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらすカテゴリ

以下, コアカテゴリは【】, カテゴリは<>, サブカテゴリは《》で囲んで示す.

1) 困難な経験・思いを語る

【困難な経験・思いを語る】とは、交流会に参加した障害児・者の母親が、障害があるわが子の困難な子育てに関連した《わが子の紹介》《悩み》《悩み》《悩みの相談》《わが子の経験》の<わが子の経験・悩みを語る>、《親の経験・思い》《抱負》の<親の経験・思いを語る>ことである.

交流会中の発言には、ある母親から「子どもの喋 る声が高い. 家の中ではよいが, 外に出た時などは 気になる. 本人は声が高いということがわからない のでしょうか. | と《悩みの相談》の発言があった. これに対して経験の長い親は, 自分の経験を振返り 「私の子も大きな声を出そうと思っていないが、自 分の音量を調整して相手に伝える力がない. このよ うな子どもの辛さを代弁していくのが母親の役割だ と思う.」と、子育てについての《親の経験・思 い》を語っていた.また,経験の短い親から「子育 てについて何が辛いかというと、自分一人で何もか も考え決めていかないといけないことだ.」や、経 験の長い親から「親としては、頭では子どものこと を理解しようとしているが、時々"ズー"となった り"ハー"となったりの日々を送っている. 子ども の問題ではなく大人の問題が反映するなと思い、違 う窓口を探してこの気持ちを穏やかにしたいなと思っ ている. | などの《悩み》についての発言があった. さらに, 交流会で話している中で気づいたり自分自 身の考えを整理して, 他者に自分の思いを伝えるた めに「早速言ってみよう. | 「今日からアドバイスの 取り組みをちょっとずつやっていこうと思う.」や、 経験の長い親からは、将来子どもが一人暮らしをす る上で問題と感じていることについて、今後取り組 もうとしていることを参加者にも投げかけ「成年後 見制度のことについて勉強しないといけないので, 勉強会をやっていこうかなと思っている.」など, これから行おうとする自分の行動の《抱負》につい ての発言があった.

2)経験・知識を伝える

【経験・知識を伝える】とは、主に経験の長い親

から経験の短い親に、障害児の子育て経験や学習から得た、役立つと思う《わが子の経験からの情報》《他の子の経験からの情報》の<子育ての経験を伝える>、また《一般的情報》《子育てに関する方法の提案》《子育てに関する考え方の提案》《子育てに関連した問題の指摘》の<子育ての知識を伝える>ことである.

交流会中の発言には、ある母親から子どもの生理 中の問題行動について相談があった. この相談に経 験の長い親から「生理の前くらいから、とてもイラ イラするのが私にも分かる. そういう時には気持ち をリラックスさせるようにしている. 例えば, 過去 に子どもが快感だったことの思い出を話し, いいイ メージを回想することで気持ちがリラックスして少 し落ち着けた.」と《わが子の経験からの情報》の 発言があった、また、兄弟の問題について「(障害 のある)兄の喋り方がまだたどたどしくて、それを 弟が指摘するようになった. 『これは助詞が違う "が"じゃなくて"ら"だ』と、それを言わせっぱ なしにしていいのか. 兄にもプライドがあると思う ので. | の《悩みの相談》があった. この発言に経 験の長い親から「言い間違いをしたら『違う』と否 定されると傷つくが、その場で正しい言い方をして あげれば、この時はこのように使えばよいというこ とが分かると思う.」と《子育てに関する方法の提 案》があった. 自閉症などの子どもは「他の子ども が自分の親から『何々したらいけんよ』と言われて いるのを聞いても自分に言われているように思いい きなり顔が険しくなり、突然その場を飛び出し『わー』 と大きな声を出したりする.」このような問題行動 があった場合の声かけに対して, 経験の長い親から わが子の経験も踏まえて、自閉症などの子どもは言 葉で状況を理解することが困難であるため、「『〇 ○ちゃんに言ったんじゃない』と子どもの名前を言 うと自分かと思ってしまう. 『今は△△君を叱って いるんだよ』と、誰に起こっている事なのかを伝え るとよい.」と、《わが子の経験からの情報》《子 育てに関する方法の提案》があった.

3) 困難な子育てを共有する

【困難な子育てを共有する】とは、障害児の子育 てに関連した【困難な経験・思いを語る】発言に対 して、参加者はわが子の困難な子育てを思い《子育ての悩みに共感》《子育ての経験・思いに共感》の <困難な経験・思いに共感>をする.一方【困難な経験・思いを語る】発言をした母親は参加者から共感を得る.また、【経験・知識を伝える】発言に対して、参加者はわが子の子育てにも役立つと思う《子育ての方法に賛同》《子育ての考え方に賛同》の〈経験・知識に賛同〉をする.一方【経験・知識を伝える】発言をした母親は参加者から賛同を得る.これら参加者相互の発言を通して、参加した障害児・者の母親が困難な子育てを共有することである.

交流会中の発言には、ある母親から「父親は仕事が忙しいが、私が必要と思う時には子育てに関わって欲しい。しかし、私が思うようにはいかない。」の《悩み》の発言に対して、経験の長い親から「私も子育ての最初の頃で、自分が一杯一杯の時は、父親に『協力してよ』とか『理解してよ』とかの思いがすごくあった。」や「そういっても毎日の生活は大変ですよね。毎日皆パンパンな状態で、同じような気持ちで過ごしているんだなと。」と《子育ての悩みに共感》した発言があった。さらに、子どもに対して、大人がそういう言い方の間違いをしているから、子どもは余計混乱してしまう。」との《子育てに関連した問題の指摘》発言に対して《子育ての考え方に賛同する》母親達が「うん、うん。」と頷いた。

4) 発言を引き出す

【発言を引き出す】とは、主に経験の長い親と司会者が、発言の機会がつかめない母親や、発言した内容に追加説明があると参加者の理解が深まると考える場合、《発言を促す》《説明を促す》ことで〈発言の機会をつくる〉. また、関係のない方向に話しが進まないように《会の進向の提案》や、発言した内容が参加者に伝わらない場合《話された悩みの解説》の〈発言の方向を示す〉を行い、交流会に参加した障害児・者の母親の【困難な経験・思いを語る】【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】発言の機会を引き出すことである.

交流会の開始時に司会者は、当日の会のテーマを 基に自由な話し合いの進め方について《会の進向の 提案》をしていた。その後,交流会参加者全員の自己紹介と当日のテーマについての発言が終わった後,司会者から「一通り皆さんにお話しいただき①②③のような3つの大きな問題が出された。それぞれの経験を出し合いながら話しを進めていけたらよいと思う。」など《会の進向の提案》をしていた。

その後、経験の長い親から「さっき、健常児の関 わり方について出しておられたので、どうなのかな と.」と《説明を促す》発言があれば、その発言の 機会を取り上げ会を進行していた。ない場合は司会 者から、「○○さん、先ほどいろいろあると言われ ていたが,よければ話してもらいたい. | など《発 言を促す》を行っていた. 経験の長い親からの《説 明を促す》発言により、説明を促された母親は、 「健常児と一緒にしている登下校の時に、悪い事も 真似てしまう.良い事を真似るのはよいが,悪い事 を真似た時に修正がきくかなという心配がある.」 と、《悩み》を詳しく説明する.このような発言に 対して〈困難な経験・思いに共感〉や〈子育ての知 識を伝える>などの発言があった.また、経験の短 い親が「子どもが情緒不安定な時に同じ音楽を繰り 返し聞いている.」との《悩み》を話したのに対し て,経験の長い親が「それ生理の時に.」と《説明 を促す》発言に対して、説明を促された母親は「生 理中で、音楽を聞くことと、食べることで自分をコ ントロールしているようだが、あまり健全ではない と思う.」との追加発言により、子どもの生理中の 問題行動と母親の悩みが参加者に理解され、話しが そのような時の対応例などに広がっていった.

司会者は、経験の短い親の表情などを観察し、発言のチャンスがつかめない親には「まだ発言されていないですが.」と《発言を促す》ことで、経験の短い親が【困難な経験・思いを語る】機会を引き出していた。また、子育ての経験・知識の提供を求めて《悩みの相談》が出されたが【経験・知識を伝える】発言がない場合、司会者は「今出されたことについて〇〇さんの経験などを話していただけませんか.」と《発言を促す》を行い、主に経験の長い親などから【経験・知識を伝える】の【発言を引き出す】も行っていた.

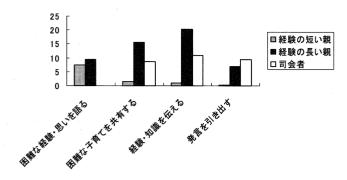


図1. 交流会の一人平均発言コード数

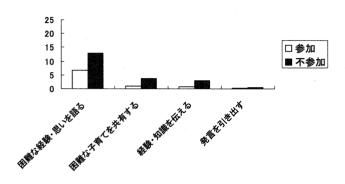


図2. 経験の長い親の参加・不参加時の経験の短い親の 一人平均発言コード数

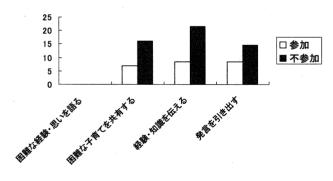


図3. 経験の長い親の参加・不参加時の司会者の 一人平均発言コード数

5)参加者の発言コード数

セルフヘルプの視点からみた障害児の子育でに関連する発言コード数をみると、《悩みの相談》は経験の短い親からの発言であり、経験の長い親からはなかった、《親の経験・思い》は経験の長い親が最も多かった、【発言を引き出す】は主に司会者と経験の長い親によるもので、《話された悩みの解説》 《説明を促す》は経験の長い親が多く、《発言を促 す》《会の進向の提案》は司会者が多かった.

コアカテゴリ別一人平均発言コード数を,経験の 長い親,経験の短い親,司会者に分類して表した (図1).【経験・知識を伝える】【困難な子育てを 共有する】は,経験の長い親が最も多く,次いで司 会者であり,経験の短い親は僅かであった.また経 験の長い親は【困難な経験・思いを語る】も多く, さらに【発言を引き出す】も司会者に次いで多かっ た.

経験の長い親が不参加の交流会は、11回中2回あり、経験の長い親の参加、不参加による発言コード数を比較した、経験の短い親は、経験の長い親が不参加の交流会では【困難な経験・思いを語る】【困難な子育てを共有する】【経験・知識を伝える】の発言数が増加していた(図2)、司会者も【困難な子育てを共有する】【経験・知識を伝える】【発言を引き出す】の発言数が増加していた(図3).

Ⅳ. 考 察

1. エンパワーメントをもたらす交流会中の発言

交流会は、障害児を育てる母親(家族)という共通する困難な子育ての経験をもつ者が集まり、障害児の子育てに関連した話し合いをする。その発言を質的に分析した結果、20のサブカテゴリ、8つのカテゴリ、4つのコアカテゴリを抽出した。

これらのカテゴリから、交流会に参加した母親達は、主に司会者と経験の長い親の【発言を引き出す】により、わが子と母親自身の【困難な経験・思いを語る】.これらの発言を聞いた母親達は、同じように障害児を育てている母親に出会い、自分の経験や思いを重ね合わせて障害児を育てる〈困難な経験・思いを語る】に対して、障害児を育て経験や学習していた.また、障害児を育てる【困難な経験・思いを語る】に対して、障害児の子育て経験や学習して得た知識等で役立つと思う【経験・知識を伝える】があった.しかし、適切な発言がない場合は、司会者が経験の長い親に対して《発育を促す》ことで、【経験・知識を伝える】機会を引き出していた.さらに、わが子の子育てに役立つ経験や知識を聞いた母親達は、〈経験・知識に賛

同>していた.一方,【困難な経験・思いを語る】を行った母親は、これを聞いた母親達からく困難な経験・思いに共感>を得ていた.また、【経験・知識を伝える】を行った母親は、わが子の子育てに役立つと思った母親達からく経験・知識に賛同>を得ていた.このような参加者相互の援助関係を示す発言のやり取りにより【困難な子育てを共有する】ことができた母親達は、障害児の子育ての孤立や困難感から精神的に開放され、また、子育ての新たな方向を見出すこともでき、セルフヘルプが促進できたと考える.

久保は¹¹⁾,SHGで用いられるセルフヘルプには,個人による自助・独立と相互援助・共同の2つの意味があると述べている。本交流会はSHGではないが,看護職である研究者と障害児・者の親の会が協同開催し,障害児を育てている母親(家族)が集まり,自由に話し合う会である。

交流会中の発言から【困難な子育でを共有する】は、参加者相互の援助関係より得られていた。また、この参加者間の相互援助関係を表す発言は、障害児の母親を子育ての孤立や困難感から精神的に開放し、子育での新たな方向を見出す自助をもたらしたと考える。つまり、久保が述べた個人による自助と相互援助の2つのセルフヘルプをもっていたといえる。したがって、交流会に参加した障害児・者の母親(家族)は、【困難な経験・思いを語る】【経験・知識を伝える】【困難な子育でを共有する】の発言によりセルフヘルプを促進したといえる。

三島¹²はSHGの機能の1つとしてエンパワーメントを挙げ、エンパワーメントとは「自らの問題を自ら解決し、生活する力を得ていくこと」と、また、安梅¹³⁾は「元気にすること、力を引き出すこと、共感に基づいたネットワーク化」と定義している。

本交流会は、久保が述べた個人による自助と相互 援助の2つのセルフヘルプをもっていた. つまり、

【困難な経験・思いを語る】【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】発言を通して、参加した障害児・者の母親の相互援助関係を形成し、個々の母親の子育ての力を引き出しいた。このことは、三島の「生活する力を得ていく」や安梅の「力

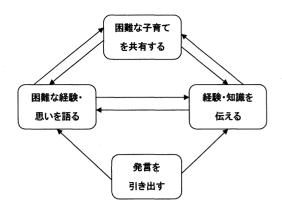


図4. 障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらす 発言のプロセス

を引き出すこと」と同じことを意味すると考える. したがって、交流会は【困難な経験・思いを語る】 【経験・知識を伝える】【困難な子育で共有する】 の発言を通してセルフヘルプが促進され、参加した 母親達にエンパワーメントがもたらされていたと考 える. つまり、交流会に参加した障害児・者の母親 は、主に司会者と経験の長い親の【発言を引き出す 】により、【困難な経験・思いを語る】【経験・知 識を伝える】【困難な子育でを共有する】のセルフ ヘルプを促進する発言を相互の援助関係を形成しな がら行い、エンパワーメントをもたらしていたこと が明らかとなった(図4).

2. エンパワーメントをもたらす会の進行

1) 経験の長い親の役割

林ら¹⁴⁾は,障害児をもつ母親が親の会に,模索的参加から探求的参加,さらに支援的参加をする 3 段階について報告している.交流会の分析では,経験の短い親の発言数は【困難な経験・思いを語る】が主であり,経験の長い親は,【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】【発言を引き出す】が多かった.この結果より,林らの報告と同じように経験の短い親は,悩みの相談や子育ての情報を得る模索的参加から探求的参加をし,経験の長い親は長い子育て経験からの情報提供や他の親の発言に対して共感・賛同し,また経験の短い親の発言機会をつくる支援的参加をしていたと考える.したがって,林らの報告と同じく交流会において経験の長い親は,経験の短い親の支援的立場にあったといえる.

しかし、岡151は長い経験のある人が毎回のように

害児の親が参加した会であっても、会の企画・運営 と参加者の発言内容によっては、エンパワーメント がもたらされないと考える. そこで交流会における 経験の長い親の発言についてみると、経験の長い親 は一人平均発言数が最も多かった. しかし, 発言で 最も多かった【経験・知識を伝える】以外に【困難 な子育てを共有する】【困難な経験・思いを語る】 【発言を引き出す】も多かった. 【発言を引き出 す】は、障害児の親のセルフヘルプを促進する発言 を引き出すものである. 例えば、ある親の《悩みの 相談》などの発言に対して経験の長い親から《説明 を促す》発言があり、説明を促された経験の短い親 は、悩みを参加者に詳しく説明することになる. こ の追加発言により、参加者は発言した母親の悩みに 対しての認識を深め、《子育ての悩みに共感》し、 また《子育てに関する方法の提案》や《子育てに関 する考え方の提案》などの発言につながっていった. したがって、経験の長い親や司会者の【発言を引き 出す】により、発言の機会を得た経験の短い親は、 自分の【困難な経験・思いを語る】ができ、また参 加者から自分の<困難な経験・思いに共感>を得て 【困難な子育てを共有する】ができていたと考える.

語り、アドバイスをするような会はSHGとは言えないと述べている.このことは、共通の体験をもつ障

本交流会における経験の長い親は、わが子が幼児期のころから学校卒業後も同じ障害種別の親の会でも積極的に活動している母親である。また、多様な障害児の母親達が交流することの必要性を理解し参加している母親達が多かった。したがって、経験の長い親の【発言を引き出す】が多い結果をもたらし、岡の指摘する、経験の長い親の語りやアドバイスが主になる会とは違い、経験の短い親の発言の機会や発言内容を再考する機会をつくるものとなったと考える。

2) 看護職の役割

経験の長い親は、経験の短い親の支援的立場にあるが、障害児の親の危機的な時期¹⁶⁾や子どもと親へのサポート体制は変化することがある。それにより経験の長い親もそれぞれの時期や状況により、新たな悩みや不安が現れてくる。今回の分析から、経験

の長い親の発言には《悩みの相談》はなかったが, 経験の長い親も「頭では子どものことを理解しよう としているがうまくいかない.この気持ちを穏やか にしたい.」のように,わが子の子育ての《悩み》 や《親の経験・思い》の発言が多くあった.経験の 長い親もこれらの発言を通して,経験の短い親へ自 分の【困難な経験・思いを語る】ことで〈困難な経 験・思いに共感〉を得て,【困難な子育てを共有す る】ことができていたと考える.また,経験の長い 親達に新たな悩みが現れた場合,親達が安心して感 情を表出できるように【発言を引き出す】ことも重 要であると考える.しかし,経験の短い親の【発言 を引き出す】は少ないことから,看護職の司会者は, 経験の長い親の【発言を引き出す】ことも重要な役 割である.

また、司会者や経験の長い親の【発言を引き出 す】により、経験の短い親は発言の機会を得ていた が、交流会への参加は自由意志であるため、経験の 長い親が不参加の交流会もできる. 経験の長い親が 不参加の交流会では、経験の短い親の発言コード数 が増加していたが、一人平均発言コード数が最も増 加したのは【困難な経験・思いを語る】であった. したがって、増加した発言からは、経験の短い親が 経験の長い親の【発言を引き出す】や【経験・知識 を伝える】などの役割の代替はできていなかったと 考える.そこで,経験の長い親の参加と不参加の交 流会で司会者の発言コード数を比較すると、経験の 長い親が参加した場合は【発言を引き出す】【困難 な子育てを共有する】【経験・知識を伝える】に関 する発言数が減少し、不参加の場合は増加していた. この違いから司会者は、経験の長い親が参加した会 では出来るだけ経験の長い親の【発言を引き出す】 【困難な子育てを共有する】【経験・知識を伝え る】発言を待ち、経験の長い親の発言の機会を引き 出していたと考えられる.しかし,経験の長い親が 不参加の会では、経験の短い親からの発言が少ない 【発言を引き出す】や【困難な子育てを共有する】 【経験・知識を伝える】の発言数を多くし、経験の 短い親のセルフヘルプを促進する援助を行っていた と考える. つまり, 交流会が障害児・者の母親(家 族)にエンパワーメントをもたらすように、看護職の司会者は、交流会の進行において参加者の構成により発言内容・発言数を調整しているものと考えられた.

小川¹⁷⁷は、専門職が参加して、障害児者とその家族のエンパワーメントに貢献するには、親と専門家が対等なパートナーシップの関係を築くことの必要性を述べている.このことは、看護職が司会者として参加者の構成により発言内容・発言数を調整して母親の発言の機会を増加させる援助ができていたまり、親を指導したり指示をするのではなく、会の進行・調整をするファシリテーター的役割が行えていたからできたことと考える.つまり、交流会参加者にエンパワーメントをもたらすには、看護職が司会者としてファシリテーター的役割を行い、交流会参加者の構成により発言内容・発言数を調整する会の進行をすることが重要であると考える.

V. 本研究の限界

データ分析の信頼性と妥当性を高めるために,交流会参加者への発言内容の確認や学識経験者の指導を受けた.しかし,研究者が交流会の司会者でありデータ分析を行ったことが,本研究の限界である.

VI. 結 論

障害児・者の親の会と看護職が協同して継続開催し、障害児・者の家族にエンパワーメントをもたらすと示唆された交流会は、【困難な経験・思いを語る】【経験・知識を伝える】【困難な子育てを共有する】【発言を引き出す】の発言から構成されていた。看護職は、ファシリテーター的役割の司会者として、交流会参加者の構成により発言内容・発言数を調整した進行を行うことで、交流会に参加した障害児・者の母親にエンパワーメントをもたらすことができる.

謝舒

本研究にご協力いただきました交流会参加者の皆様,研究へのご 助言をいいただきました学識経験者の諸先生に深謝いたします. (受理 '07.06.10 決定 '08.06.12

汝 献

- 1) 峠田和史・村松大治・橋本佳美他:養護学校通学児童の在 宅介護の実態と介護者の健康状態,日本公衛誌,44(10): 779-787,1997
- 2) 北川かほる・笠置綱清:要介護障害児をもつ母親のQOLに 関する検討,鳥医短大紀要,32:47-50,2000
- 3) 日暮眞・恒次鉄也・森本尚子他:子育で 障害児をもつ家族への支援、小児科臨床、53(増刊):1211-1216, 2000
- 4) 山口裕子・内山久美・藤田佳代子:軽度発達障害児の親の 語りと「親の会」の結束,保健科学研究誌,2:41-50, 2005
- 5) Law M·King S·Stewart D·King G: The perceived effects of parent-led support groups for parents of children with disabilities, Physical and Occupational Therapy in Pediatrics, 21:29-48, 2001
- 6) 牛尾禮子・郷間英世・佐藤典子:在宅重症心身障害者をも つ母親支援 ーグループづくり 個別相談 交換ノートを 試みて-, 小児保健研究, 59(4):508-513, 2001
- 7) 小林啓子・甲斐静江・西山直美他:障害児の親のセルフへ ルプ活動 -母子保健とヘルスプロモーション-,東京都 衛生局学会誌,105:476-477,2001
- 8) 岡知史:日本のセルフヘルプグループへの基本的要素「まじわり」「ひとりだち」「ときはなち」. 地域福祉研究. 33(2):118-136, 1992
- 9) 三原博光:セルフヘルプ活動とエンパワメント,(小田兼三・杉本敏夫・久保則夫編),エンパワメント実践の理論と技法,46-59,中央法規,東京,1999
- 10) 舟島なをみ:質的研究への挑戦, 医学書院, 東京, 1999
- 11) 久保紘章:セルフヘルプグループとは何か,(久保紘章・石川到覚編),セルフヘルプ・グループの理論と展開,2-20,中央法規,東京,1998
- 12) 三島一郎:セルフヘルプ・グループの機能と役割、(久保 紘章・石川到覚編)、セルフヘルプ・グループの理論と展 開、39-54、中央法規、東京、1998
- 13) 安梅勅江:エンパワメントのケア科学, 医歯薬出版株式会 社, 東京, 2004
- 14) 林知里・伊藤美樹子・早川和生:障害児の親の会 (SHG) へのかかわり方にみた障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス,日健教誌,10(1):9-20,2002
- 15) 岡知史: セルフヘルプグループとは何か, (大阪セルフヘルプ支援センター編), セルフヘルプグループ, 14-20, 朝日新聞厚生文化事業団, 東京, 1998
- 16) Mac Keith R: The feelings and behaviour of parents of handicapped children. Dev Med Child Neurol, 15: 524-527, 1973
- 17) 小川喜道:障害児者のエンパワーメント, 脳と発達, 32(3): 60-62, 2000

Methods of Conducting Support Group Meetings to Promote Empowerment among Mothers of Handicapped Children and Adults

Kahoru Kitagawa¹⁾
1) School of Human Nursing, University of Shiga Prefecture

Key words: Empowerment, Family nursing, Handicapped children and adults

The purpose of this study was to assess the content of meetings between nurses and mothers of handicapped children and adults, and to promote empowerment among this group during support group meetings hosted by a nurse. Qualitative analysis was performed on the content of support group meetings of 115 mothers of handicapped children and adults, in addition to 11 hosts who participated in 11 support group meetings held in 2005. The results revealed that the host and experienced mothers mainly made "expressions of encouragement" to other participants. Participants were encouraged to "express of difficult experiences and feelings," "express of experiences and knowledge," and "share of difficult experiences in raising one's children." During meetings attended by experienced mothers, nurses promoted self-help among participants by creating opportunities for experienced mothers to "express of experiences and knowledge," "share of difficult experiences in raising one's children," and "expressions of encouragement." During meetings not attended by experienced mothers, nurses themselves "expressions of encouragement," "express of experiences and knowledge," and "share of difficult experiences in raising one's children." These findings indicate that nurses promote empowerment among mothers of handicapped children and adults participating in exchange meetings by facilitating and guiding the content of express, depending on the group composition.